

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

私の断水体験記

和歌山県 和歌山県立向陽中学校 二年 福田 純伶

「急いで家中の水をためて。」
と母が言った。

「わかった。」

と家族それぞれ思い思いの場所に散らばる。

ほんの数分前まで私たちは平凡な日曜日の夕方をのんびりと過ごしていた。ふいに友人達から連絡がきた。

「断水になるみたいだから、水をためておいたほうがいいよ。」

という内容だった。急いでテレビをつけると紀ノ川にかけられた水道橋が崩落した映像が映し出されていた。

私たちの住む和歌山市は真真中に紀ノ川があり、浄水場はすべて対岸にある。その水を運ぶ唯一の橋が崩落したのだ。私は正直焦った。頭が混乱し、不安が込み上げてくる。私はただそこに立っていた。その時、母の一言ではっと我にかえる。

「そうだ、今のうちに水をためなければいけないんだ。」震える心をなんとか落ち着かせながら私は蛇口をひねった。勢いよくジャアアッと水が出た。「よかった、まだ水が出る。」という安堵感。

水をどんどんためていく。手分けして、容器も探す。まずはお風呂。そしてやかん、お鍋、水筒、タライ、バケツなど。それが終われば洗濯機や食洗機を回したりしながら、おかずやごはんを大量に作って冷凍したりした。

「これから、水がなくなると何が困るんだろうか。」と想像しながら対策していると、普段から、水を使わなければ困ることだらけであるというところに改めて気づいた。作業は夜遅くまで続いた。

翌日、蛇口をひねると、水はチョロチョロと少なくなっていて、ツンと薬のような匂いがして、これからは、蛇口の水が使えないことを知った。顔を洗うとき、溜めた水を少し汲んで洗った。朝ごはんは、洗い物

が出ないように紙皿にラップをかけたものにごはんを入れて割り箸で食べた。トイレはためた水で流した。対岸にある学校では蛇口をひねると水が出たので私は不思議な気持ちになった。帰宅すると、また水が使えない世界。

お風呂は沸かせないので水で洗ったら冷たくて震えた。次の日からは夕方高速に乗って祖母の家に行き、お風呂に入らせてもらい、ポリタンクで水を入れてもらうことになった。母はペットボトルの水を買いに行っても売っていなかったと話していた。断水当日に水をインターネットで注文したが、注文が殺到していたようで断水が終わるまで届くことがなかった。そんな中、友人が遠くから水を届けてくれたり、近所の小学校に給水車が来てくれたり、井戸水を自由にくましてくれるお家があったり、沢山の優しい気持ちにも感謝しながら過ごした。この水道橋崩落は、全国ニュースでもとりあげられていた。私は、毎日「早く終わらないかなあ。」と思っていた。ところがそんな苦しい生活が一週間続いた。

「今日から水が出ます。」という放送が流れて父が蛇口をひねったとき、濁った水が勢いよくとびだした。

「蛇口をひねると水が出る」そんな普通だと思っていたことがどんなに待ち遠しかったことか……。水が濁らなくなつてから、コップいっぱいに入った水を一気に喉へ流し込んだ。その時に飲んだ水は、今までで一番おいしくてあたたかい味がした。私はほっと胸をなで下ろした。そして私が飲んだこの一杯の水が届くまでたくさんの方々が昼夜を問わず働いて努力してくれたおかげであることを改めて考えた。工事をして、橋の上に水道管を設置してくれた方々。浄水場で水をきれいにする為に働いてくれている方々。今まであたり前にあると思っていたことは、決してあたり前でなかったことに気づかされて、感謝の気持ちでいっぱいになった。この気持ちを忘れずに水を大切に使うていきたいと思った。